荒神谷青銅器発見40周年
里帰り! 国宝青銅器 ―埋納の地へ―

Homecoming! National Treasures Bronze Artifacts Exhibition - Back to Their Resting Place

国宝展ニュース NO.1

(全体会期 :2025.4.9(水)～2026.1.12(月・祝))

発行年月日 : 2025年4月9日(水)
発　　行 : 荒神谷博物館

今からさかのぼること41年前、青銅器発見以前―。現在の荒神谷博物館がある斐川町神庭西谷(ひかわちょうかんばさいだに)は、人の行き来もまれで、一帯は静寂に包まれていました。

しかし、永遠の眠りを覚ますかのように、突如として起こった広域農道建設予定地からの銅剣発見により様相は一変。その後の発掘調査の結果、昭和59年(1984)に銅剣(どうけん)358本が、そして翌年の昭和60年(1985)に銅鐸(どうたく)6個・銅矛(どうほこ)16本が出土しました。青銅器はその後、平成10年(1998)に一括して国宝に指定されました。

この度、保管先である島根県立古代出雲歴史博物館が休館することから、埋納の地・荒神谷で、5回に分けて青銅器を展示することとなりました。

展示の様子 銅剣 B28・B29・B30
銅鐸 1号
銅矛 13・14号
(文化庁蔵・古代出雲歴史博物館保管)
[第1期公開期間:4/9(水)～6/2(月)]

学芸員の"推し"！～生まれは出雲？ 1号銅鐸～

第1期の"推し"は"1号銅鐸"です。1号銅鐸の特徴は、なんといっても他の銅鐸とは違いその特異性にあります。第一に、鐸身(たくしん)において片面に重弧(じゅうこ)文、他面に市松(いちまつ)文という、他の銅鐸には無いきわめて珍しい文様が施されているという点です。

次に、鈕(吊り手)の形が独特であること。鈕は通常◇の形状をしていますが、1号鐸は凸の形をしているのが特徴的です。これらの独自性は他の銅鐸には見いだせず、1号銅鐸は銅鐸生産の中心地である近畿ではなく、出雲で製作された可能性があります。

1号銅鐸

荒神谷発掘物語 その①～思いがけない発見～

荒神谷の発掘調査が開始されたのは昭和59年(1984)7月11日。この日、試掘トレンチから須恵器(すえき)や掘立柱建物跡(ほったてばしらたてものあと)などが見つかりましたが、この時点では青銅器が発掘されることなど予想すらされていませんでした。

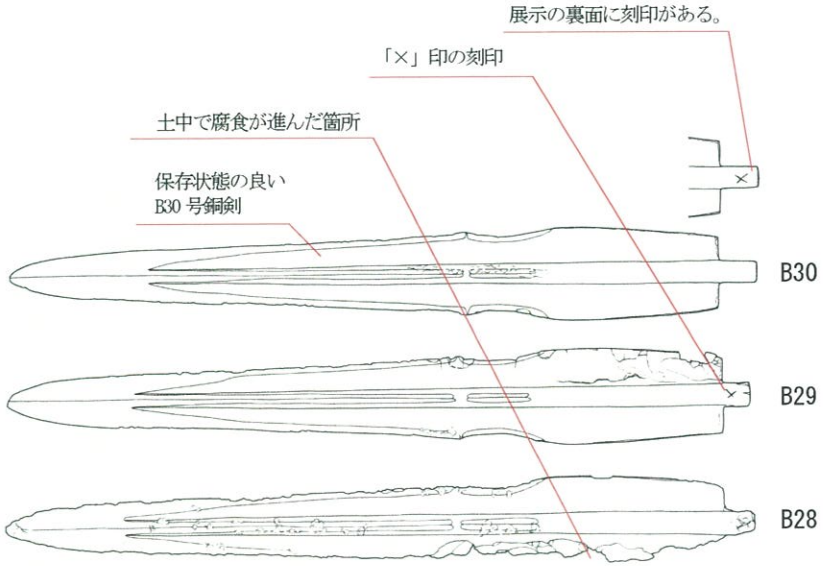
翌12日、現在の出土地にあたる第8試掘坑(しくつこう)を発掘していた作業員が「鉄のようなもの」を発見、調査員が駆けつけると、そこには、銅剣が4・5本重なり合って横たわっているのが見えたといいます。ちょうど日の暮れかかる、夕日がまぶしい時でした。青銅器発見の瞬間です。 (文：学芸員N)

発掘時。銅剣の一部が見えている
(画像提供:島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)

里帰り！国宝青銅器 ―埋納の地へ―

Welcome Home! National Treasure Bronze Artifacts - Returning to Their Ancient Origins

銅剣

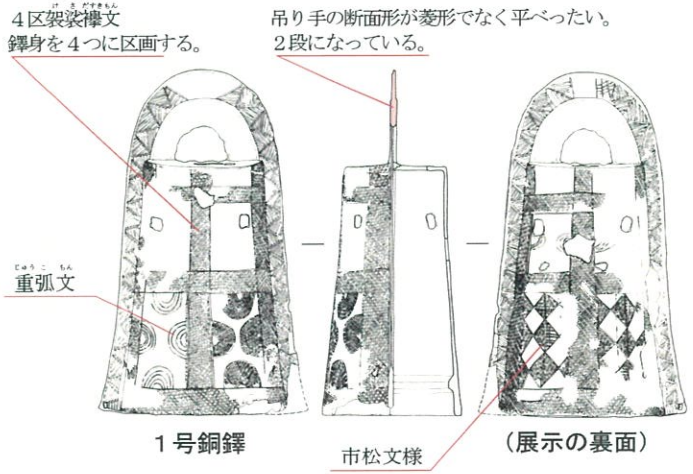


358 本出土したうちの３本で、この３本は隣あって埋納されていました。
荒神谷遺跡の銅剣はすべて「中細形Ｃ類」と呼ばれるタイプです。

長さの違い／プロポーションの違い

358 本の銅剣を鋳造するのに、約 220 個の石鋳型が使用されました。銅剣はどれも同じように見えるかもしれませんが、同じ鋳型から作られたもの（同笵銅剣）が少ないため、じつはかなり個体差が大きく、バリエーションが認められます。

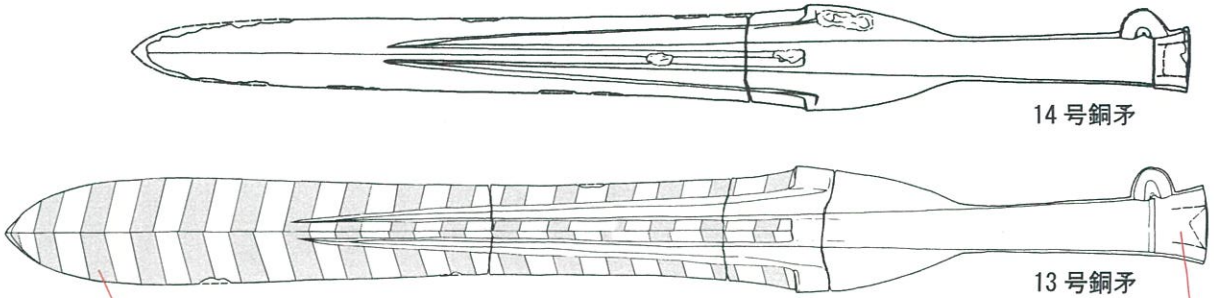
銅鐸



６個出土したうちのひとつです。
この１号銅鐸は吊り手の形態や文様構成が通常の銅鐸と大きく異なっていて、他に例のない極めて個性的な、珍しい銅鐸です。

銅矛

16 本出土したうちの２本です。ともに「中広形」と呼ばれるタイプですが、長く幅広の 13 号銅矛の方が後で製作されたと考えられます。



刃部の研ぎ分け
研磨方向を変えることにより、
矢羽根状の文様をつけている。
光を反射させると浮き上がる。

袋部の内側には、鋳造時の
中子土がそのまま残されている。
柄を一度も差さなかったことを
ものがたる。